



キーワー



ドのカン

川崎ゆきお

世の中には頭のいい人というか、賢い人がいる。世の中で起こっていることをうまく整理出来る人で、それを言葉でうまくまとめる。それを聞いた人は、ああなるほど、そういうことかと納得したりする。

宮本のグループにもそういう人がいて、リーダーとなっている。当然だろう。

「有馬さんもたまには判断を間違えることがあるんだなあ」

有馬がそのリーダーだ。

「有馬さんでも把握出来なかったのかなあ」

宮本は有馬に同情的だ。有馬が間違っただのなら、仕方がない。

「有馬さん、何でも知っていそうだったけど」

「そこが違うんだよ。有馬さんは細かいことはあまり知っていない。僕らの方が詳しいほどだ」

「そうなんだ」

宮本は有馬の弁護を続ける。

「有馬さんはパターンで認識しているんだよ」

「類型からの類推かい」

「でないよ、あれほどしっかりと認識出来ないよ」

「つまり、抽象化能力が高いってこと」

「そうそう、だから、学校の成績もよかった」

「普通、それを頭のいい人っていうんだろ」

宮本は、それとは少し違うと思っている。

「カンだよ」

「カン？」

「カンが鋭いんだ。同じような情報を得ても、僕らとは違うんだ。演算がね」

「速いとか」

「そうじゃない。繋げ方や整理の仕方に違いがあるんだ」

「宮本君は、そんなことよく分かるねえ。リーダーの有馬さんと同じことが出来るんじゃないの」

「繋ぐには間に何かがある」

「えっ」

「整理するにしてもタグがある」

「えっ」

「それを思い浮かべるのがうまいんだ」

「ほう。それって、キーワードを使うってことでしょ」

「そのキーを見つける力が、あの人にはあり、僕らにはない。キーがあれば、鍵は開く。それに合うキーを探すのがうまいんだ。キーワードの前にもう一段階あるんだ。これは言葉じゃない」

「もう、分からないよ。宮本君」

「だから、それはテクニックじゃないだ。カンなんだよ」

「ほう」

「僕らにもカンはあるが、勘違いの方が多い。だから、有馬さんも全能じゃないから、たまには勘違いもあるってことだ」

「しかし、珍しいねえ、有馬さんが読み違えるんて」

「いや、まだ分かりませんよ。状況が変われば、有馬さんの判断は正しいことになる」

「変わりますかねえ」

「僕が有馬さんなら、あえて間違ったとみている」

「ほう」

「読み違えたことで、相手は油断するだろう。有馬リーダーも大したことないと。狙いはそこかもしれないよ」

「よく分かるねえ。宮本君」

「なーに、ただ単に有馬さんを弁護しているだけだよ」

「そうか」

「ヘッド部を有馬さんに任せているんだよ。気に入らなければ、自分で考えてやればいいんだからね」

「じゃ、一緒に泥を被るってことかい」

「だから、それが有馬さんの作戦かもしれないから」

「そこまで考えているかなあ。有馬さん」

「まあ、任せましょう。僕らの判断よりもましだから。これは流れなんだと思うよ。ミスも」

「いい部下だねえ、宮本君」

「僕に出来ることは、それぐらいだよ」

「有馬さんが崩れたら、次のリーダーは君だね」

「いやいや、それは辞退だ。僕にはそんなカンはないしね。こればかりは才能なんだよ」

「ああ」

了